

— 人体因子の計測による衿ぐり, 肩傾斜角及び背面ダーツ量 —

県立新潟女子短大 平沢和子

目的 平面裁断法において, 体型の個体差, 経年性変化を表現し, 補正を前提としない原型を得るには, 人体因子を数量化し, 平面図化する短寸式原型がある。前回の青年女子50名に引きつづき, 老年女子50名(65~75才)を被験者とし, 後身頃の衿ぐり, 肩傾斜角, 背面ダーツ量の人体因子を問い, これらをどのように数量化, 平面図化するべきかを検討し, 背面体表に近似した単純平面図を得る努力をした。結果は誤差の少い不織布で体表への適合性を確かめ, 体型の個体差及び経年性変化を推察した。

方法 第一報に同じ(31回本学会総会要旨集 P.148)

結果 ① 後衿ぐりは頸巾, 頸丈, 案内値の3点を計測しよい適合性を得た。但し条件として肩傾斜角, 背面ダーツ量の適合があげられこの個体差は大きい。老年の衿ぐりの顕著な特徴は頸巾小, 頸丈は大である。② 肩傾斜角, 従来の一律の肩ダーツ量に対し, 個体差を表現する背面ダーツ量を製図上生み出すには, 後身頃の傾斜角は計測肩角度からは得られない。背面立体量を長さにおきかえた最大長が肩巾の範囲に納まる点とN・Pを結ぶ角度が肩傾斜角度となる。計測肩角度右 $\bar{x}=24.3^\circ$, 後身頃傾斜角 $\bar{x}=14.8^\circ$ 老年は頸巾小, 肩巾小に対し背面立体量は大となり, これが肩傾斜角に現われた。立体量を表わす角度老年 $\bar{x}=10.0^\circ$ 青年 $\bar{x}=5.0^\circ$ 即ち製図上の肩角度は計測肩角度プラス背面立体量の角度である。③ 背面ダーツ量, 青年に比べ背柱の彎曲, 腕の前寄りのつき方とその筋肉の衰退, 背肩巾部位の脂肪の沈着は, 背面面積の増大, 又複雑となり, 前面は縮小する。従って背面ダーツ量は増し, 青年の如く単純な一本ダーツでは適合しない場合も出現した。